

令和元年10月24, 25日開催

全国高等学校国語教育連合会 第52回研究大会鹿児島大会

兼 第63回九州地区高等学校国語教育研究大会 発表用資料

漢詩に描かれた心情を複数教材で読み味わわせる指導

鹿児島県立加治木高等学校 教諭 鮫島裕之

研究の概要

一般に漢詩の授業は句法と現代語訳の指導に偏りがちで、生徒主体の鑑賞にまで至らない傾向が見られる。本実践では1年生を対象に、漢文(漢詩)に対する抵抗感を抱かせないことを第一に考えつつ、漢詩の鑑賞まで行わせることを目指す。各詩人の漢詩作りの方略(ストラテジー)に注目しつつ複数の漢詩を関連付け、比較し、解釈を深めることで読む能力の向上を図ろうとした実践である。

I 実践における主題設定の理由

1 実践の背景

高等学校では、私も含めて、教科書に掲載されている漢文をそのまま取り上げて、句法の理解・訓読・現代語訳の指導に終始する授業になりがちで、漢文に対する興味の喚起は後回しなのが現状であろう。確かに訓読のしかたなど、スキル面の学習を進めることは必要である。だがスキル面の学習に気を取られるあまり、教科書に掲載されるほど優れた教材の文学的価値を忘れてはいないだろうか。スキル面の習得も行いつつ、さらにテーマを考慮した漢文教材を編成すれば、作品を読み味わう授業が展開できるのではなかろうか。それによって、漢文に対する興味・関心を喚起することが可能になるのではなかろうか。以上のような観点から、本レポートでは、漢文学習初期の生徒(1年生)たちに、意欲的に学習に取り組ませる工夫を提案したい。

近年、主体的・対話的で深い学びに注目が集まっているが、本レポートは学びの思考が活性化される漢文学習の視点を提案することにもなると考える。

平成30年3月告示の高等学校学習指導要領第2章第1節国語の第2款第6「古典探究」の内容A読むこと(1)のエに「作品の成立した背景や他の作品などとの関係を踏まえながら古典などを読み、その内容の解釈を深め、作品の価値について考察すること。」、オに「古典の作品や文章について、内容や解釈を自分の知見と結び付け、考えを広げたり深めたりすること。」とあり、教材の鑑賞から考えを深めることが求められていることがわかる。

そこで今回、私は(2)に示された指導例のイ「同じ題材を取り上げた複数の古典の作品や文章を読み比べ、思想や感情などの共通点や相違点について論述したり発表したりする活動」を参考にして実践の構想を立てることにした。

2 実践の動機

事前に聞くと、古文が好きだという印象をもつ生徒の方が漢文が好きだという生徒よりも多く、漢文は漢字だらけで抵抗があるという生徒もいた。このことから、生徒は漢文に距離を感じていると思われた。そこで漢詩の授業を通して生徒の抵抗感を取り除こうと考えた。

ここで、漢詩(絶句)を教材として選んだ理由を述べる。絶句は定型であるため読みのポイントを絞りやすく、比較的短いため読むのが苦にならず、そのため複数に渡っても取り扱いがしやすいという特徴があるからである。いわゆる長文の漢文に比べて抵抗感が少ないと考えるのである。

漢詩が定型であるというのは、詩型や押韻に加え、前半の二句が作品世界の舞台設定、後半の二句が作者の感情を描くという起承転結の構成も指している。この構成をもとに考えれば、鑑賞のしかたにもある程度の型があるということであり、鑑賞がさほど難しいものではなくなるということになる。

私は新任のころ、教科書掲載の教材をどのように扱えば鑑賞に結び付けられるのかがわからなかった。ただ単に現代語訳を行い、その訳を手掛かりにして感想を述べさせていたと記憶している。かつての私には、先輩の先生方が行っていたような漢詩の作者の作詩の技術や世界観や心情に迫る授業の工夫が、残念ながら不足していたようだ。

本実践の構想中、参考にしようとして若手の先生に意見を聞いたのだが、その先生もまた、どのようにして生徒の興味・関心を喚起したらよいか、どのようにしたら鑑賞にまで導けるのかと、かつての私と同じような悩みを持っていることを知った。

そこで基本に立ち返り、諸先輩方を見習ってしっかりした読み方を教えれば、生徒たちは自然と的確な漢詩の鑑賞を行うようになるのではないかと仮定し、各詩人の漢詩作りの方略(ストラテジー)に注目しつつ複数の漢詩をテーマで関連付け、比較し、解釈を深めることで読む能力の向上を図る授業を行おうと考えた。

Ⅱ 実践の構想

1 ねらい

各詩人の漢詩作りの方略(ストラテジー)に注目しつつ複数の漢詩をテーマで関連付け、比較し、解釈を深めることで読む能力の向上を図ること。

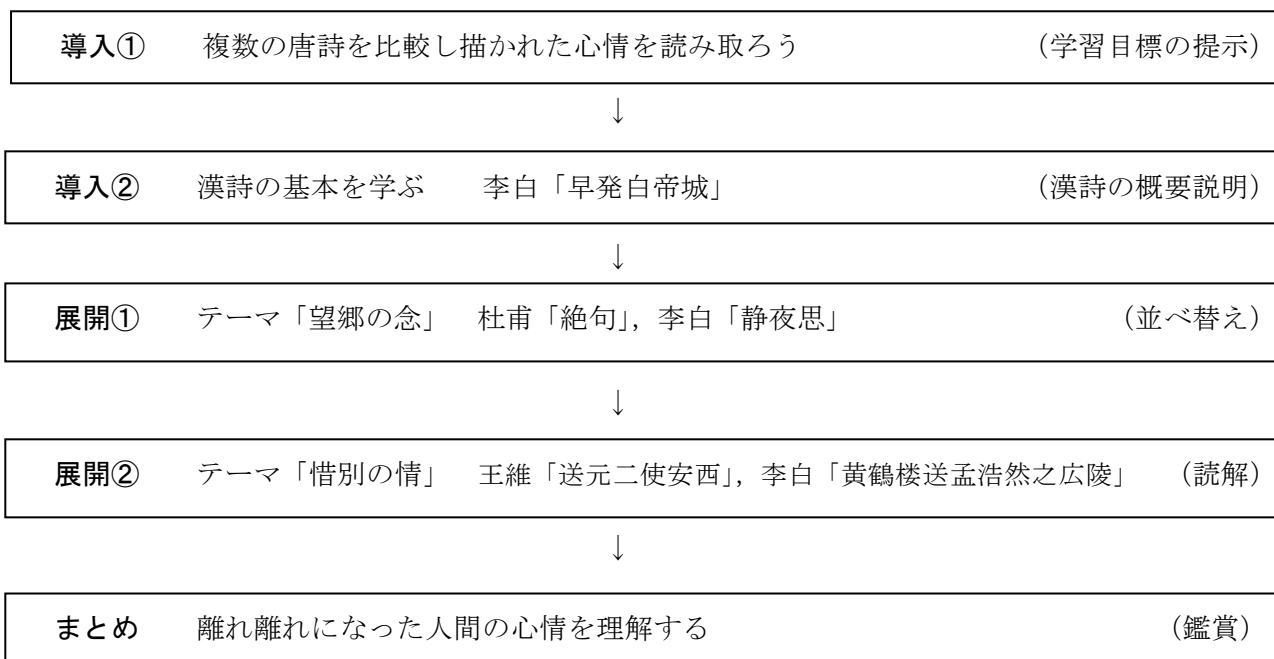
※現行の学習指導要領との関連性

「国語総合 内容C 読むこと」の指導事項「ウ 文章に描かれた人物、情景、心情などを表現に即して読み味わうこと」に合致する。漢詩の記述に基づいて読み味わわせる、読む能力の育成を目標にしている。

※新学習指導要領との関連性

「古典探究 内容A 読むこと」の指導事項「ウ 必要に応じて書き手の考えや目的、意図を捉えて内容を解釈するとともに、文章の構成や展開、表現の特色について評価すること。」(各教材毎)→「エ 作品の成立した背景や他の作品などとの関係を踏まえながら古典などを読み、その内容の解釈を深め、作品の価値について考察すること。」(全教材を関連させて鑑賞)

2 本単元における教材編成



導入①で、漢詩を読んで人々の心情を知るという学習目標を示す。さらに、漢詩を比較しながら解釈し、鑑賞することも示す。

導入② 李白「早発白帝城」で、(仕官の)希望を胸に旅立つ李白の心情を押さえる。

前半二句と後半二句の役割を中心に、漢詩の構成について解説する。そして、視覚(彩雲など)・聴覚(猿声)を用いた表現、遠景から自分の乗る小舟が山々の間を下る様子を客観的に映像として捉える映画のような表現技法、スピード感(転句・結句など)の表現、振り切る「猿声」＝後ろ髪ひかれる思い＝恋人の存在を想起することなどに注目させる。まとめとして、後の鑑賞につなげるために、石川忠久先生が若き李白の旅立ちの心情を描いた作品と解釈した根拠を、表現に即して確認させる。

展開①-1 では杜甫「絶句」で、①起承転結句の役割、②押韻、③前半二句と後半二句の役割がわかっているかを、並べ替えで確認する。例えば、対句(山の新緑との赤い花、青い川に浮かぶ白い鳥)、情景の描き方(前半二句で美しい春の景色を描き後半二句で春の景色を見ても楽しめない憂鬱を描く)という点について、考えさせたり解説したりする。なお、この作品は杜甫が左遷された先で官職を辞め、友人を頼って蜀の地に仮住まいの身で長安に帰りたいという望郷の思いを詠んだものである。蜀と長安の位置関係を確認するために地図を用いて立体的に作品を読む。解釈した後、上記の背景知識をもとに鑑賞のしかたの演習を行う。

展開①-2 では李白「静夜思」で、①起承転結句の役割、②押韻、③前半二句と後半二句の役割を念頭に、並べ替えをヒントにして解釈・鑑賞させる。構成では対句(挙頭と低頭)、情景の描き方(前半二句で月光に気づいたこと等を描き、後半二句で月を見て故郷を思い出して切なくなったこと描く)、自然な視点の移動を映像が浮かぶように表現するという点に留意して解釈・鑑賞させる。

李白は「早発白帝城」で描く蜀を出発(25歳)した時から6年後の放浪の身であり、現在の湖北省安陸の小寿山で望郷の思いを詠んだ。この「静夜思」の解釈のために地図を用意して蜀(故郷)と小寿山の位置関係を確認する。

班別で解釈をさせた後、鑑賞の演習を行う。例えば、寝室に差し込む月光に気づいたことから、窓を開けていたことが推理できるので、季節が夏だとわかるが、そのような表現の巧みさや、「早発白帝

城」との対比で、月を見て思い出す相手は故郷にいる恋人(家族)だと想起できることなどである。

展開②-1 では王維「送元二使安西」を使って解釈・鑑賞する。

遠景から近景にカメラが寄るように映像的手法で読者をひきつける巧みな表現(「静夜思」での既習事項)、前半二句で雨(涙を連想)に濡れる渭城の街を舞台とし、後半二句で西方の灼熱の太陽と乾燥した砂漠地帯へ進み、さらに関所(陽関)から外国へと旅立つ元二との今生の別れになるかもしれないという悲痛な惜別の情を読み取らせる。シルクロードにというに気づかせるために地図を用意する。

展開②-2 では李白「黄鶴楼送孟浩然之広陵」を使って解釈・鑑賞する。

「送元二使安西」で学んだ「惜別の情」や「早発白帝城」で既習の李白自身の旅立ちの心情、孟浩然の旅立ちを見送る「黄鶴楼」における李白の気持ちを比較させる。前半二句の旅立ちの賑やかさや華やかさと後半二句の悠久の川の流れを前に一人取り残されて佇む李白の姿を映像的に表現していることにも留意する(友人の華々しい出発を見送る複雑な惜別の情を詠んだもの)。地図を用意し、立体的な解釈や鑑賞の一助とする。

最後に、既習の漢詩を比較しながら鑑賞(生徒には感想でよいと指示)させ、漢詩に描かれたそれぞれの作者の心情について読み深めさせる。

Ⅲ 仮説

各詩人の漢詩作りの方略(ストラテジー)に注目しつつ複数の漢詩をテーマで関連付け、比較し、解釈するというしっかりした読み方を教えれば、自ずと生徒の読みが深まり、的確な漢詩の鑑賞を行うようになるなど、読む能力の向上を図れるのではないかな。

Ⅳ 実践の概要

1 単元名 唐詩に描かれた情景や心情を読み味わおう

(平成31年3月初旬に1年生を対象に行った)

2 単元の目標

- | | |
|-------------------------------|------------|
| (ア) 学習を通して、漢詩に興味を持つ。 | (関心・意欲・態度) |
| (イ) 漢詩に描かれた情景、心情を読み味わうことができる。 | (読む能力) |
| (ウ) 漢詩の構成や韻字や鑑賞の視点について理解する。 | (知識・理解) |

3 各時間の指導の実際

【1時間目】

ワークシート①の1(次頁)を使い、漢詩の形式を説明した(絶句・律詩のこと、五言・七言のこと、押韻のこと)。次に、下記①～⑤について説明した。

①起承転結句の役割、②押韻、③※前半二句と後半二句の役割、④漢字の意味を考えて解釈すること、⑤五感(視覚や聴覚など)を駆使して解釈すること

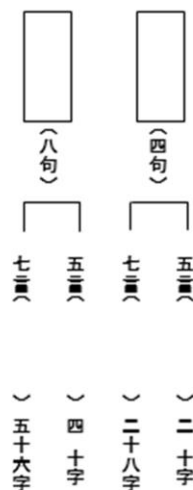
※絶句では前半二句が作品の舞台設定、後半二句が作者の心情の吐露という構成になっている。起句・承句で舞台設定がしっかりしていれば転句・結句で心情の吐露が効果的に行える、という趣旨の石川忠久先生の講義を、筆者が学生時代に受けたことに基づく。

ワークシート①の1

一年(組) (番 氏名)

漢詩の形式

四句(四行)の漢詩を「四言」(四句(八行)の漢詩を「五言」)という。それぞれの型に一句(一行)あたりの漢字の数が五字のもの「五言(ごごん)」と、七字のもの「七言(しちごん)」がある。



古詩——近体詩(絶句や律詩)ができる前の漢詩の形。句数制限がないので、字数も不定。

押韻について

漢詩では、詩の響きを美しくするために、一定の句末を同じ韻でそろえるという決まりがある。韻をそろえることを「押韻(おうえん)」する。または「韻を踏む(ふむ)」といい、押韻している字を「韻字(いんじ)」という。

五言詩では
() () () () ()
七言詩では第一句で
() () () () () () ()

に押韻するのが原則である。

起承転結について

句数が四句の漢詩を「四句」という。() () () () は第一句(起句)で内容を起こし、第二句(承句)でこれを受け継ぎ、第三句(転句)で内容を転じ、第四句(結句)で結ぶという原則がある。この構成を「起承転結」という。

対句法について

字数や文法的構造が原則として等しく、内容的にも対応している句を二つ並行して並べたものを「対句」という。

次に李白の「早発白帝城」を示し、上記①～⑤を踏まえて、どのように解釈するかを質疑応答を交

ワークシート①の2 ※縦書き。白帝城と江陵の位置関係が分かる地図をつけた。

早 発 白 帝 城 李 白

朝 辞 白 帝 彩 雲 間

吉兆を表す七色の雲 視覚

千 里 江 陵 一 日 還

当時、大都市だった 「千里」の距離を「一日還」→スピード感、期待ではやる気持ち

両 岸 猿 声 啼 不 住

聴覚 切ないテナガザルの鳴き声→後ろ髪を引かれる思い=故郷に残した恋人?(石川忠久)

軽 舟 已 過 万 重 山

早朝、瑞雲たなびく空の下、白帝城に別れを告げ

千里も離れた江陵にたった一日で行こうとする

川の兩岸は切り立った崖。そこから聞こえる(自分を引き留めるあの人を想起させる)猿の切ない鳴き声がまだ耳の中に残っているのに、

私を乗せた小舟は(その思いを振り切るかのように猛スピードで)もう、幾つもの山の前を(矢のように)通り過ぎていく。

えながら実演した。

以上の内容を踏まえ、李白が夜郎へ流されて赦免にあい帰るときの59歳作説と、李白が初めて蜀を出た25歳の作とする説があることを示し、どちらがよいかを考えさせた。その後、石川忠久先生が25歳説をとることを生徒に話した。「猿声」が後ろ髪を引かれるような切ない鳴き声であり、恋人を想起させることやスピード感が若者にふさわしい表現であること等を根拠として示すと、生徒は興味深そうにしていた。鑑賞をより正確に行うには情報を集め、様々な知識をつなぎ合わせる必要があると話した。前半二句で期待を胸にはやる気持ちを抱えた李白の様子が設定されることで、後半二句で自分を引き留めようとする存在や迷いを振り切るような猛スピードで川を下る必然性が出た作品である(鑑賞)。この時、生徒に解釈の仕方(漢字の意味をもとに行う)と鑑賞の仕方(スピード感が表現するものを考える)を実演した。

【2時間目】

①起承転結句の役割、②押韻、③前半二句と後半二句の役割、④漢字の意味を考えて解釈すること、⑤五感(視覚や聴覚など)を駆使して解釈すること

ワークシート②を用いて、

のうち①～④が理解できているかを確認した。

②より、五言絶句の押韻は偶数句末だから、BとCが偶数句だと分かる。

対句を探せばBとDがセットで残ったAとCがセットである。

ワークシート②	
一年()組()番 氏名()	
◆次のA～Dを、後の①～③の指示に従って正しい順番になるように並べ替え、漢詩を復元しなさい。	
A	今 春 看 又 過 ぐ
B	山 青 花 欲 然
C	何 日 是 帰 年
D	江 碧 鳥 逾 白
①	A～Dのそれぞれを、書き下し文に改めなさい。
A	
B	
C	
D	
②	意味を考えながら、正しい順番に並べ替えなさい。
	※ヒント：色が読み込まれている句には目
③	②のように並べ替えた理由を書きなさい。

③ より、DBとACがセットで

③よりDBが前半二句でACが後半二句だと決定できる。

以上の学習活動を、班別で行った。根拠を示すように指示したため、勘に頼る生徒はいなかった。ただしA～Dの解釈を行ってから意味を考えつつ並べ替えた生徒がいた。その生徒にはこれが①～④

絶句 杜甫

江 碧 鳥 逾 白

視覚 青色 白色

山 青 花 欲 然

緑色 赤色(燃) 前半二句…美しい春の景色

今 春 看 又 過

何 日 是 帰 年

後半二句…前半二句の春の景色に心を動かされることなく、悩む様子

後半二句…前半二句の春の景色に心を動かされることなく、悩む様子

川に水鳥が浮いている。澄んだ青色に鳥の白色が映える。

背後の山は新緑で青々として、その中に赤い花が咲き、まだまだ開花しようとしている。

(そんな美しい春の景色を見ても楽しめず、)今年もまた春が通り過ぎていく。

いったい、いつになったら故郷に帰る日が来るのだろうか。

の確認のための学習活動であると念を押したが、解釈ができるのは前後のつながりを考えて全体像を把握する能力があるからでもあるので、強く改めるようには言わなかった。

杜甫が放浪の身になってから数年が経ち、望郷の念で満たされていることがわかる。前半二句の美しい春の風景があるからこそ、後半二句のその春景色にも心楽しめない杜甫の気持ちが強く印象づけられる。これらの解釈に加え望郷の思いについて、班別の話し合い活動で考えさせた。

【3時間目】

ワークシート③		一年(組) (番) 氏名()		
◆次のA～Dを、後の①～③の指示に従って正しい順番になるように並べ替え、漢詩を復元しなさい。				
静 夜 思 李 白				
A	举 ^レ 頭 ^ニ 望 ^ミ 山 ^一 月 ^ヲ			
B	床 ^ニ 前 ^ニ 看 ^ル 月 ^光 一 ^ヲ			
C	疑 ^フ 是 ^レ 地 ^上 霜 ^{カト}			
D	低 ^シ 頭 ^ヲ 思 ^フ 故 ^郷 一 ^ヲ			
① A～Dのそれぞれを、書き下し文に改めなさい。				
D	C	B	A	
② 意味を考えながら、正しい順番に並べ替えなさい。				
□ ↓ □ ↓ □ ↓ □				
※ヒント…作者の視線移動に注目しよう。				
③ ②のように並べ替えた理由を書きなさい。				

①起承転結句の役割, ②押韻, ③前半二句と後半二句の役割, ④漢字の意味を考えて解釈すること, ⑤五感(視覚や聴覚など)を駆使して解釈すること

ワークシート③を用いて, 2時間目と同様に,
の①～④が知識として定着しているかを確認した。

対句の観点より, AとDがセットである。②より, 押韻は偶数句末だから, **AD**の順だと分かる。

残る二句はBCの順かCBの順か→Cに「疑是」とあり, 「是」が指示語だから, 「白い月の光を見て, これが地上に降りた霜かと目を疑った」という文脈になると推理し, **BC**の順に決定。

③より, 思いを述べた**AD**が後半二句で**BC**が前半二句だと決定できる。

静夜思 李白

床前看月**光** →五言絶句の押韻の原則は偶数句末だが, 初句末に押韻することもある

「床」は「ゆか」ではなく「とこ」の意。寝る前に月光を見た **視覚**

月の光が寝室に差し込んでいたことから, 窓は開いていた→季節は夏である

疑是地上**霜**

寝室で見た光のもと(月)を見ようと外を見て, 地面も白くなっていると気づく

举頭望山月

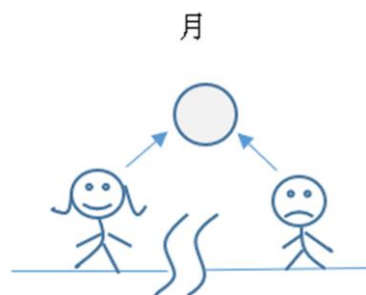
そこで月を見ようと顔を上げたら山にかかる月が見えた

低頭思故**郷**

月を見て故郷を思い出す 「月」の見方に関する文化的背景は？

まるで映画のようなカメラワーク＝自然な視点移動(視線誘導)

「月」の意味は？(背景知識)



以上の学習活動を2時間目と同様に, 班別で話し合いながら行った。根拠や前後のつながりを考えて並べ替えることができ, 2時間目の内容が理解できていることを確認できた。

李白も杜甫同様に, 望郷の思いで満たされていることがわかる。前半二句から始まる月光による読者の視線誘導は転句まで続き, 月を見て故郷にいる家族(恋人)のことを思い出し, 切なくなったという結句に至る。まるで映画のようなカメラワークで読者の気持ちを自然に誘導し, 当時の誰もが経験のある, 月で大切な人と時間共有するという事柄を入れて, 望郷の思いを読者と共有している。

以上の点について適宜説明を入れながら、2時間目同様に望郷の思いの読み取りを、班別話し合い活動で考えさせた

授業の最後に、作詩について初学者向けの説明を行い、容易ではなかった漢詩作りをこともなげにやってのけたと言われる李白のすごさについて理解させた。

作詩の初心者が練習で作るのは七言絶句である。たった二十八字の漢字で構成されるが、漢字は表意文字なので多くの情報を込めることができるため、字数以上に広い世界観を表現できる。

また、近体詩と呼ばれる漢詩は作詩の規則で厳しく縛られており、規則を守って作ったものだけが漢詩と名乗ってもよいものである。例えば、「二四不同、二六対、反法、粘法、反法、四字目の孤平を避ける、韻字は同じカテゴリーに属するものだけを使うなどである。現在、教科書に載っているような漢詩がなぜ教科書に採択されているかが、この一事を見ただけでもわかるだろう。

3時間目までを終了して、感想を二百字以内で書かせた。「早発白帝城」は導入教材と位置づけ、実際に自分たちで話し合い活動を行った「絶句」と「静夜思」の二編を対象に、それぞれ百字で書かせる意図がある。以下にその感想の一部を紹介する

・漢詩の鑑賞にあたり、対句や押韻などを勉強しました。以前は難しい印象だった漢詩も、対句や押韻を理解すると構造が分かりやすくなりました。杜甫の「絶句」では景色の描写が対句で美しく表現されていて、後半の暗い雰囲気との対比が技巧的で楽しかったです。一方の李白の「静夜思」は視線の動きによる描写がとても面白かったです。以上の勉強を通して、漢詩ならではの表現をもっと楽しみたいと思いました。

・二つの漢詩を読んでみて、その面白さに気づいた。少ない文字列の中に多くのルールが存在しているにも関わらず、情景がしっかりと浮かび上がってくることに驚いた。どちらも望郷の念を詠んでいるが、特に「静夜思」が好きだ。なぜなら、視線移動が一句ごとに行われているところがすごく面白いと思ったからだ。また、季節を言わなくても戸を開けておくことで夏を想像させる李白の漢詩はすごいと思った。

・二つの漢詩の復元に挑戦した。「静夜思」を書き下し文に直す際に作者の視線移動に気づいたが、実際に並べ替えると視線が下から上、上から下へと移動しており、とても面白かった。次に現代語訳をしてみると、とても切なく「望郷の思い」を詠んでいることを知った。また、対句の面白さも発見した。今までテスト対策だとかで意識せずなんとなく読んでいたが、これからは楽しみながら読めるようになると思う。

・今回漢詩を読んで、今まで自分が抱いていた漢詩に対するイメージががらりと変わった。漢詩は固い文だとばかり思っていたが、読み解くにつれ、作者のいる舞台や情景、心情の変化までも生き生きと伝わってくるようであった。特に私は「静夜思」に強い印象を持った。なぜなら、文の構成もさることながら、李白の視線移動やその時の心情、さらには季節まで綿密に組み込まれていたからだ。漢詩の世界は複雑だが、とても面白いと思った。

多くの生徒の感想の中に、「漢詩を面白いと思った」という言葉が異口同音に入っていたことから、漢詩を通して漢文への興味・関心を喚起するというねらいが概ね達成されたことがわかる。

また、句法や構成を意識した者は多かった。並べ替えの手法が功を奏し、主体的に考えたことがうかがえる。どの感想からも授業に真剣に取り組み、学習活動に積極的に参加していたことが読み取れる。

【4 時間目】

ワークシート④を用いて、王維「送元二使安西」の解釈と鑑賞を行わせた。

ワークシート④ ※縦書き。長安と渭城と陽関と安西の位置関係が分かる地図をつけた。

送 元 二 使 安 西 王 維

渭 城 朝 雨 浥 輕 塵

軽い砂埃(砂塵) 遠景

客 舍 青 青 柳 色 新

雨で砂塵が流されて柳が青々としている→砂塵が舞う渭城の街の近くにあるものは？

=砂漠(シルクロードを連想する) **ズームイン**

勸 君 更 尽 一 杯 酒

誰が誰に酒を勧めているのか？

寄ったカメラが旅館の室内へ

西 出 陽 関 無 故 人

故人の意味は？陽関とは？

いつもは砂塵舞う渭城だが、朝から降る雨が舞い上がる砂をしっとりとぬらしている。

街中の旅館の側に生えた柳の葉についた砂埃も雨で洗われ、本来の鮮やかな緑色を見せる。

その旅館の一室で、私の注ぐ酒を、さあ君(元二)よ、もう一杯飲んでくれ。

西方に進んで陽関を出れば(そこは外国で)、知り合いは一人もないのだから。

詩型と押韻の確認後、前半二句がどんな舞台設定になっているか、漢詩の構成から確認させた。慣れていないためか、カメラが街全体の遠景から旅館の一室まで寄っていくように映像が想像できることに気づかない生徒がほとんどだった。「静夜思」で学んだ視線移動の観点が定着すれば、これに気づく生徒も出ると考えられる。結句まで解釈すると、起句の「雨」が別れを惜しむ涙雨の役割を果たすことに気づいた生徒もいた。雨が涙に喩えられることは現在でもよくあるので、気づいたのだろう。自分の経験や知っている言葉と結びつけて考えられたのは良い傾向であった。

地図を用意し、砂埃が何を意味するのかを考えさせた。渭城は現在の陝西省咸陽市であり、かつての秦の首都だったことを確認させ、陽関が現在の新疆ウイグル自治区との境にある関所で、その自治区にある現在の庫車(クチャ)県だと確認させた。地図を用いたのは、この距離感がわからないとこの詩で述べる王維の惜別の情の悲痛さが伝わらないと考えたからである。すると、ゴビ砂漠やその先のタクラマカン砂漠に気づいた生徒がおり、砂塵は国境地帯の砂漠から飛来するのだと確認できた。この先に待ち受ける危険な長旅のことを考えた上で、生徒に鑑賞させた。前時同様に班別で話をさせた。

なお、前時・本時・次時では「みくに出版『アクティブラーニングに導くK P 法実践』川嶋直，皆川雅樹 編著」を参考に，K P 法(紙芝居プレゼンテーション法)を使って，グループごとに解釈をさせた。また，班別の話し合いの際にはK J 法(付箋を用いたブレーンストーミング)を用い，考えを整理させた。

【5 時間目】

ワークシート⑤を用いて，李白「黄鶴楼送孟浩然之広陵」の解釈と鑑賞を行わせた。

ワークシート⑤ ※縦書き。黄鶴楼と広陵(揚州)との位置関係が分かる地図をつけた。

黄 鶴 楼 送 孟 浩 然 之 広 陵 李 白

故 人 西 辞 黄 鶴 楼

「送元二～」で「故人」は既習。

煙 花 三 月 下 揚 州

「煙花」の意味は？「下」から分かることは？

孤 帆 遠 影 碧 空 尽

「帆」＝船 「孤」＝一隻だけぽつんと 「碧空尽」とはどのような情景か？

唯 見 長 江 天 際 流

「見」→誰が何を見ているのか 「長江天際流」とはどのような情景か？

友人孟浩然是，西方の，この黄鶴楼に別れを告げ

春霞たなびき花咲き乱れる三月に，揚州へと船で下っていく。

ぽつんと浮かんだ遠くに見える船の帆の先端が青空と川の彼方に消え，

私はただ悠々と流れる長江の水が空と川の境目に流れるのを呆然と見ているだけだった。

既習の漢詩の知識を使えば，起句，承句は解釈しやすかったようだが，それでも考え込んでいる生徒もいた。聞けば，漢字の書き取りが苦手な生徒であった。授業で学んだそばから地道に語彙力をつけていくしかないと励ました。

転句と結句は雄大な長江の流れと大空を想像できなかったようで，解釈に苦戦したようだが，中学の頃に授業で一通り習った生徒が複数名いたため，班ごとの話し合いでおおまかな意味は把握できたようであった。

授業で「碧空尽」や「天際流」の状況説明をさせると，全く説明できない生徒も見られた。授業ではこの説明ができるようになることを重視し，漢字の意味を考えること，場所を地図やインターネット画像で調べ，イメージすることなどをアドバイスした。インターネットなどがあっても，情報検索のための情報では意味がない。情報は身近なものと結びつけて具体的にイメージし，説明できて初めて生きるものだと言導した。

5時間目まで終了し、3時間目終了時と同様に感想を二百字以内で書かせた。「送元二使安西」と「黄鶴楼送孟浩然之広陵」の二編が対象で、それぞれ百字で書かせようという意図である。以下にその感想の一部を紹介する。

- ・私は「送元二使安西」を読み、改めて漢詩はすごいな、と思いました。あの短い文章の中で、大きな視点から小さな視点となって、更に心情まで詠んでしまう、しかも心情・情景共にもの凄く深くなっていて、驚きました。李白の「黄鶴楼～」の方は、再び学習した(中学で既習)ことにより、先生の解説もあり、より細かい舞台設定や内容を学習できてよかったです。李白の詩は本当に凄くて、思わずため息が漏れそうなほどでした。
- ・今回、二つの漢詩を読んで、特に印象深かったのは、「送元二使安西」だ。なぜなら、たった二十八文字の文の中に作者や登場人物の場所移動やその時々的心情と風景の対比など、表現に優れているからだ。私が特に好きなのは後半の二句で、転句を読む時のリズムの良さや、作者が酒を勧める理由が結句で分かった時はとても感動した。作者が友人のことを気遣い、しっとり降る雨の中で酒を酌み交わす部分は深くて良いと思った。
- ・私は二つの漢詩について学習した中で、特に「黄鶴楼送孟浩然之広陵」が印象に残りました。中学校で一度習ったときよりも、深く内容をとらえることができました。晴れ晴れとした情景の中で、孟浩然を見送る主人公の一人だけ取り残されたような心情が伝わってきて、卒業シーズンに友だちや先生方と離ればなれになった時の気持ちを思い出しました。はっきりと表現しなくても心情が伝えられていて、すごいと思いました。
- ・両方とも舞台設定や心情の表し方がとても細かく伝わりやすい詩だと思った。「元二」は雨から別れの辛い雰囲気が伝わり、結句からは別れた後の心細さが読み取れる。「黄鶴楼」の方は、黄や紅などのおめでたい色を設定し、それと対になるように水平線に沈んでいく舟の様子を帆を出すことで表現し、見送る自分と対比させている。私が文章を書くときも、このような技法などで分かりやすく表現できるようにしたいと思った。
- ・「送元二使安西」は舞台設定から別れの悲しさが表現されていると思いました。直接は書かれていませんでしたが、酒を勧めるのは関所を出ると知り合いがいなくなるからだと解釈できたとき、書かれていないが気持ちが込められていると感じました。「黄鶴楼送孟浩然之広陵」は壮大な景色と別れがうまく描かれていて、李白はすばらしいと思いました。時の流れまでもが漢詩から読み取れるのもすごいと思いました。
- ・「送元二使安西」では、広い範囲の情景からだんだんと一つの旅館へとフォーカスされていて、今まで読んだ漢詩の中で一番はっきりと情景をイメージすることができました。「黄鶴楼送孟浩然之広陵」は、中学校で習ったことをぼんやりと思い出しながらより深く読み込めて楽しかったです。特に帆が見えなくなるという情景も想像はしていましたが、改めてこの表現を使うことで遠くに流れていく風景を想像できました。

漢詩に興味がわいたという趣旨の3時間目後の感想に比べ、5時間目後の感想は、「感動した」「すばらしい」など、より読みが深まったことを示すものになっている。また、各漢詩に用いられた技法について触れているものが多く、漢詩の内容を表現に即して読み取ろうとしていることがわかる。

またそれぞれの漢詩を関連付け、比較して読んだことをはっきりと示している感想も見られた。

・私は二編の友人を見送ることを題材にした漢詩を読んで、同じテーマでも一人一人、作風が変わると思った。どちらの漢詩からも見送る人の寂しさや悲しみが伝わってくる点では同じだと思う。しかし、王維の漢詩は永遠の別れを連想させて、李白の漢詩は都会に行く友人を羨ましく思う心情を描いている点では、大きく異なると思う。同じ題材の漢詩を読み比べてみるのはさまざまな発見があって、面白いと思った。

・どちらの漢詩も見送りに関するものですが、書き方を中心に表現の違いがあり、読み比べてみると面白かったです。私は李白の詩よりも王維の詩のほうが好きでした。やはり、結句が印象深く残っています。李白の詩は前時の詩(「静夜思」)とは全く雰囲気の違い、本当に同じ人物が書いたのかと疑ったほどです。この漢詩(「黄鶴楼～」)はすでに知っていましたが、何回読んでもいい詩だなと思いました。

・「送元二～」では、別れの雰囲気作りのために舞台設定から工夫を凝らしており、すごいと思った。雨が砂塵を流す様子は、別れを悲しむ王維の心情を象徴していると思える。「黄鶴楼～」は孟浩然が一人で旅立つことへの李白の悲しさを壮大な世界観で表現している。「早発白帝城」では見送られる側であった李白が、今度は見送る側になっている。この二編は展開の速さが大きく異なる。心境の違いが出ている。

V 成果と課題

1 漢詩に対する抵抗を感じさせないこと、構成を意識して読ませること

構成を意識させるためにランダムに並べた漢詩を正しい順番に並べ替えさせるという方法をとったが、これはねらい通りだったと考える。個人で考えている様子やその後の班別討議での様子からは、根拠をしっかりと考えた上で並べ替えていることがうかがえたからである。押韻や対句や起承転結という言葉は知っていても、実際にそれが何を意味するものなのかは作詩してみるのが一番だが、これは読むことの単位であり、作詩は作詩で指導を要するため、並べ替えの手法は効果的だったといえる。

3 限終了時の生徒の感想を読むと、漢詩の構成上の工夫に気づき興味ที่わいた生徒が多かったことがわかる。特に、前半二句と後半二句にはそれぞれ構成上の役割があり、前半の舞台設定次第で後半の心情表現が生きるか否かが決定されることの意味がしっかり理解できた生徒や、漢詩の中に映像が埋め込まれていることを知って、記述通りに想像できている生徒がいたのは成果である。

「漢詩に対する抵抗感をなくすこと」が目標の一つであったが、漢詩を通して漢文への興味・関心を喚起するというねらいは概ね達成されたと考える。

よって、単元の目標「(ア) 学習を通して、漢詩に興味を持つ。(関心・意欲・態度)」「(ウ) 漢詩の構成や韻字や鑑賞の視点について理解する。(知識・理解)」に関しては、概ね達成できたと考える。

どの感想からも授業に真剣に取り組み、学習活動に積極的に参加していたことが読み取れた。

2 取り扱う漢詩の順番を意識して教材編成すること

①「早発白帝城」、②「絶句」、③「静夜思」、④「送元二使安西」、⑤「黄鶴楼送孟浩然之広陵」の順番で生徒に示し、学習活動を展開した。

①は旅立ちの心情を詠んだ漢詩だが、⑤は友人を見送る漢詩であり、立場の違いを比較して読むことができた生徒が見られた(5限後の感想)。違いに気づくことでそれぞれの漢詩で表現されている時間の流れや心情の明暗等がはっきり意識できると考えたのであるが、この点について言及している生徒は少なかった。

②と③が「望郷の念」、④と⑤が「惜別の情」をテーマにした漢詩であり、これらをそれぞれのテーマ内で読み比べ、違いについて述べた感想も少なかった。『〇〇の漢詩』と『××の漢詩』を比較して感じたことを書きなさい(字数制限なし)」というふうに、感想を書く時間をきちんと確保して書かせれば、もっと漢詩どうしを関連させた感想が多く見られたものと反省している。

ただし、単元のも目標である「(イ) 漢詩に描かれた情景、心情を読み味わうことができる。(読む能力)」については、漢詩の構成を意識させることでおおむね達成できると判断できる感想ばかりであった。

3 まとめ

「旅立ち」「望郷の念」「惜別の情」をテーマに教材を編成し、個々の漢詩の作者の技法に注目してそこに描かれた作者の視点を確認し、まとめでそれぞれの作者の視点の違いに気づかせることで生徒の読みを深めさせようとした。そのテーマ設定に加え、構成を意識させるための起承転結句の並べ替えという指導方法をとった。作者の視点を含めた作品の関連性と指導方法を合わせたことで、生徒の学習意欲が高まったことが本実践の成果であると考えている。

余談だが、私はかつて漢詩の師匠から「漢詩は絵心がないと作るのに苦労する。是非とも水墨画の練習をしてほしいものだ。」と教えを受けた。思うに、漢詩・漢文は地図や場面を書くなどして、立体的・地理的に教えるのは当たり前だった。また、人物や視点の動きとして動画的に教えることも当たり前の工夫だった。そのことが積極的になされなくなったために、生徒の興味や学びが弱くなっている実態があるように思う。その基本的事項を手法として再提案したことも、この実践の副次的成果であると思う。

漢詩の作者の視点に立てば、どのような技法が使用されているのかがわかりやすい。そうすれば漢詩の鑑賞ももっと楽に行えるようになるはずである。今後も生徒に基本的な手法や視点等の作者の技術に注目させ、しっかりした読み方を教えることで、自然と的確な鑑賞ができるよう指導に努めたい。

同一テーマによる複数教材を比較させつつ読ませることは、読みの深化に有効である。今後、漢詩だけでなく、長文の漢文や古文においても同様に時間軸や空間軸等を背景知識として駆使する手法で生徒の興味関心を喚起しつつ、読みの深化を図るような授業の工夫を行っていこうと考える。

参考文献

- | | | | |
|---------|----------------------|------|---------|
| ○ 太刀掛呂山 | 『詩語完備 だれにもできる漢詩の作り方』 | 1991 | 呂山詩書刊行会 |
| ○ 石川忠久 | 『漢詩の魅力』 | 1993 | 時事通信社 |
| ○ 石川忠久 | 『漢詩のこころ』 | 1996 | 時事通信社 |
| ○ 石川忠久 | 『漢詩の楽しみ』 | 1996 | 時事通信社 |
| ○ 石川忠久 | 『漢詩を作る』 | 1998 | あじあブックス |

- | | | | |
|---------|---------------------|------|-------|
| ○ 大槻和夫編 | 『国語科重要用語 300 の基礎知識』 | 2001 | 明治図書 |
| ○ 石川忠久 | 『漢詩の講義』 | 2004 | 大修館書店 |
| ○ 石川忠久編 | 『漢詩鑑賞事典』 | 2018 | 講談社 |